



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	クルト・ゴスヴァイラー著 熊谷一男 編訳「現代ファシズムと金融資本」 1977年5月 未来社 ii+204+vii ページ
Author(s)	中村, 通義
Citation	北海道大學 経済学研究, 29(1), 331-338
Issue Date	1979-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31455
Type	departmental bulletin paper
File Information	29(1)_P331-338.pdf



＜書 評＞

クルト・ゴスヴァイラー著 熊谷一男 編訳

「現代ファシズムと金融資本」

1977年 5 月 未来社 ii+204+vii ページ

中 村 通 義

1.

本書はドイツ民主共和国科学アカデミー中央歴史研究所でドイツ現代史を研究しているクルト・ゴスヴァイラー教授の講演、論稿などを、熊谷氏が編集し翻訳したものである。目次は次の通りである。

序文（クルト・ゴスヴァイラー）

一 現代ファシズム

二 ファシズム・帝国主義・小ブルジョアジー

Ⅰ ファシズムを「中産階級」の運動と捉える理論の批判

Ⅱ ファシズムの前提

三 ユンカー階級とファシズム

四 ヴェイマル共和国およびファシスト・ドイツでドイツ独占ブルジョアジー・「アメリカ派」が演じた役割

五 帝国主義で大銀行が果す役割 ——金融資本概念の検討——

Ⅰ 帝国主義で銀行が果す役割について

Ⅱ 独占ブルジョアジー内部のグループ間闘争で大銀行が果す役割

Ⅲ 独占銀行の支配者は誰か

〔付論〕

一 レーニンが述べているのは、産業資本に対する銀行資本の主導的役割についてなのであろうか……ハンス・ラダント ——クルト・ゴスヴァ

イラーの「帝国主義で大銀行が果す役割」に対する所見——

二 金融資本の形態変化について……熊谷一男 ——クルト・ゴスヴァイラーの合同製鋼株式会社史論によせて——

編訳者あとがき

このうち一、二、四の三つはゴスヴァイラーが1974年秋に来日したさいの講演であり、三と五はドイツ民主共和国で公開された論稿である。また、付論の一は、副題にあるようにハンス・ラダント教授のゴスヴァイラーの第五論文に対する批判であり、二は金融資本の形態変化に関するゴスヴァイラーの論点を熊谷氏が紹介したものである。

2

私はドイツ現代史については素人である。したがって書評をするといっても、本書の内容のすべてにわたって詳細に検討し、評価するだけの資格はない。しかし本書には、帝国主義論、現代資本主義論に関心をもつものの一として、方法論的に興味をそそられる問題が含まれている。それは、われわれが両大戦間なり第二次世界大戦後なりの資本主義を分析しようとする場合、レーニンの『帝国主義論』をいかなる形で利用しなければならないか、あるいは逆に、いかなる形で利用してはならないかという問題である。これを誤ると、国家独占資本主義、ファシズム等の重要な諸概念が明らかにならなだけでなく、はねかえって金融資本、帝国主義の概念内容にもクルイが生じてくるであろう。以下、本稿では、主としてこのような問題関心から「ファシズムに関するドイツ民主共和国の代表的な歴史家の一人」（編訳者あとがき、201 ページ）であるゴスヴァイラーの所説を吟味する。といっても、吟味の対象は主として、一「現代ファシズム」に限定し、必要に応じて、二「ファシズム・帝国主義・小ブルジョアジー」、五「帝国主義で大銀行が果す役割」に言及することにしたい。彼の方法を窺い知るにはこれで十分だからである。

一「現代ファシズム」で、ゴスヴァイラーはまずファシズムの基盤を「主として没落の危機に脅かされていた小ブルジョアジーから成る広範な大衆」(8ページ)に求める見解を批判し、イタリア、ドイツの「両ファシスト政党はその成立の当初から、企業家や大土地所有者、軍部や国家機関の有力者層の共感と支持をえていたこと。……かれらは、……支配階級がかれらに政権をゆだねたからこそ、権力をえることができた。権力を獲得したのちにこれら両ファシスト政党は、小ブルジョアジーが当初かれらに期待していたような政策ではなく、金融資本や大土地所有者の利益をはかる政策を遂行した」(同上)ことを強調している。ここでは、「支配階級がかれらに政権をゆだねた」と簡単に言い切っている点が気になるが、それは先にいって問題にすることにして、それではこのようにして成立したファシズムの本質を彼はどう捉えているか。彼はこれを「ファシズムは独占資本の政治体制であり『金融資本のもっとも反動的な、もっとも排外主義的な、またもっとも帝国主義的な分子の公然たるテロ独裁』である」(11ページ)と規定している。しかしこの規定はきわめてあいまいである。第一次世界大戦以前のいわゆる古典的帝国主義段階における政治体制も基本的には「独占資本の政治体制」である。また金融資本はその本質からして「反動的」であり、進歩的な金融資本などというものはありえない。好意的に解釈すれば、金融資本とはそもそも反動的なものであるが、なかでも「もっとも反動的」なものが事を起こすのだというふうに受取れるが、そうだとするならば、それは第一次世界大戦以前にもそうであり、両大戦間の金融資本に特有のことではない。このような疑問は「もっとも排外主義的な」あるいは「もっとも帝国主義的な」といういい方に対しても同様に向けることができる。こういうことをいうと、何か揚げ足とりをしているように受取られかねないが、けっしてそうではない。のちにもみるように、彼はファシズムとか国家独占資本主義とかの新しい概念を規定しなければならない肝腎のところで、しばしば、既存の概念にこの「もっとも」とか、「とくに」とか、あるいは「きわだって」とかというような、程度を示すにすぎない副詞を付すことによって、それを規定しえたかのよう

にして議論を進めるのである。このようにみてくると、彼の規定は結局、ファシズムとは「金融資本」の「公然たるテロ独裁」であるということをいっているにすぎないことになる。しかしこれでは、あまりにも無内容ではあるまいか。彼はすこし後のところで「権力を掌握したファシズム」と「他のブルジョア的な支配形態、とくにブルジョア民主主義」(13ページ)の相違点を三つあげているが、その内容も上に見た彼の見解を出るものではない。

3

ところでゴスヴァイラーは「国家独占資本主義とファシズムとの関連の研究はとりわけ理論的にも現実政治の上でも興味深い」(17ページ)として次のようにいう。「われわれは独占〔資本〕の権力と国家権力が癒着して形成された統一的な(しかし、どの道矛盾にみちた)支配機構を国家独占資本主義と名づける。このような発展は、資本主義の帝国主義段階への移行から不可避免的に生じた。国家独占資本主義とは、発展し開化した帝国主義である」(同上)。一読して明らかなように、これもまたきわめてあいまいな規定である。国家独占資本主義とは「独占〔資本〕の権力」と「国家権力」との「癒着」によって形成される支配機構であるといっても、問題はその「癒着」の内容にある。すくなくとも、この「癒着」が第一次世界大戦以前の独占資本の権力と国家権力の「癒着」とどう違うのかが明確にされねばならない。そうでなければ、たんなる帝国主義とは区別して国家独占資本主義という概念をもちだすことは無意味であろう。たんに帝国主義が「発展し開化」すれば国家独占資本主義になるというだけでは、何もいったことにならない。もっとも、彼もこれにつづいて「国家権力と独占〔資本〕の権力との合同の直接的で一段と深い原因」(同上)を三つあげている。しかしそのいずれも古典的帝国主義期から存在したものであり、第一次世界大戦後に特有のものとはいえない。たとえば彼は三つ目に「政治目標(例えば世界支配)と制約された経済的可能性との間にある不一致を、力をことごとく集中して投入することにより解消させようとする志向。したがって国家独占資本主義は、独占〔資本〕

の権力がとくに強大で帝国主義的矛盾がことのほか尖鋭化し、切迫しており、帝国主義の目標が、それを実現する可能性ととりうる手段とからきわだってかけ離れているところで、もっとも急速かつ強力に発展している」(同上)というのであるが、ここで述べられているような事態は、なにも第一次世界大戦後になってはじめて出てきたものではない。第一次世界大戦じたいが「帝国主義の目標が、それを実現する可能性ととりうる手段とからきわだってかけ離れていた」ことから勃発したのである。なおさきにもふれたように、ここでも彼は「とくに」とか「ことのほか」とき「きわだって」とかいう、程度の差を表わすにすぎない副詞を多用している。

それではゴスヴァイラーのいう帝国主義なり国家独占資本主義なりと、ファシズムとはどのような脈絡でつながっているのか。以下の引用は彼の一パラグラフの叙述を、便宜上、四つに分け、番号を付したものである。

- (1) 「国家権力は、ファシズムのもとで、独占〔資本〕の権力ととくに密接に融合する」。
- (2) 「ファシスト国家は独占〔資本〕による勤労者の搾取と国民の抑圧、戦争準備と戦争遂行のため、とくに社会生活のあらゆる領域に介入し、わけても社会的再生産過程の形成に直接介入する」。
- (3) 「ファシスト国家は同時に独占資本のために、国家独占資本主義の発展と深化にとって障害となるすべてのものを除去する」。
- (4) 「それ故ファシズムは、国家独占資本主義の発展、国家と独占〔資本〕の癒着、金融資本の代表者と制度による国家行政権の直接引受けの一頂点を示すものである」(17～18ページ)。

みられるとおり、彼の「国家独占資本主義とファシズムとの関連」についての説明はきわめて分かりにくい。さきにみたとうり、彼によれば、国家独占資本主義とは国家権力と独占資本の権力との癒着を意味するものであった。

(1)ではファシズムのもとで、両者は「とくに密接に融合する」というのである。つまり、帝国主義が「発展し開化」すれば、いずれは国家独占資本主義になるのであるが、ファシズムが存在すれば、両者の融合は「とくに密接」

になるというのであろう。次に一つとんで(3)をみると、ファシスト国家は国家独占資本主義の発展にとって、障害になるものを除去する役割を果たすものとされている。これで見ると、ファシズムは国家独占資本主義の成立、発展のための速乾性接着剤が、露払いのようなものにすぎない。しかし、国家独占資本主義とファシズムとは、このような外面的な関連しかもたないものなのであろうか。この両者は、もっと内的に一体化した機構をなしているのではないかという疑問をもたざるをえない。次に(2)をみると、ここでファシスト国家が行なうとされている政策は、多かれ少なかれ古典的帝国主義の時期にもみられるものであり、かならずしも、ファシスト国家に固有の政策とはいえない。(4)はいままでの繰返しであるが、一つ新しい要素が加わっている。ファシズムは「金融資本の代表者と制度による国家行政権の直接受けの一頂点を示す」というのがそれである。ここでの「金融資本」あるいは「金融資本の代表者と制度」とは何を指すのであろうか。国家独占資本主義とは「独資[資本]の権力と国家権力とが癒着して形成された……支配機構」であるという場合の「独占資本」と、ここでの「金融資本」とはどういう関係にあるのであろうか。独占資本とは別に、それと並んであげられる金融資本とは一体どんなものか。私にはとうてい理解しがたいのである。さらにさきにみたように、彼はファシスト政党は「支配階級がかれらに政権をゆだねたからこそ、権力をえることができた」といていたのであるが、そこでの「支配階級」とは何であったのか。それは「金融資本の代表者」以外にはありえないであろう。とすると「金融資本の代表者」は一方でファシスト政党に政権をゆだねつつ、他方では「国家行政権の直接受け」をやるという、まことに不可解な役割を果たさねばならないことになる。

第二の「ファシズム・帝国主義・小ブルジョアジー」と題する講演は、主としてイデオロギーとしてのファシズムを論じたものであるが、ここにも私は、すでに述べたような疑問に対する解答を見出すことができなかった。

- (1) ヒルファディングの帝国主義イデオロギーについての周知の叙述「こうして、古い自由主義的理想の克服として帝国主義のイデオロギーが発

生する」(「金融資本論」第5篇、第22章)を受けて、ゴスヴァイラーはいう。「第一次世界大戦後十年の経験にてらして、われわれは補うことができる。そしてこの帝国主義イデオロギーが最も極端に尖鋭化して、そこからファシズム・イデオロギーが発展した！」(43ページ)。

(2) 「ファシズム・イデオロギーは独得な純粋な帝国主義イデオロギーである」(同上)。

(3) 「ファシズムは、帝国主義に内在する反動と暴力への衝動の最も極端な帰結である」(44ページ)。

みられるとおり、ここにも例によって「最も極端に」、「独得な純粋な」、「最も極端な」とかいう言葉が氾濫しているだけであって、概念がないのである。

4

ゴスヴァイラーは「ファシズム研究はレーニンの帝国主義分析に依拠すべきであって、正しく理解すれば、帝国主義研究の不可分な構成部分である」(51ページ)という。第一次世界大戦以降の資本主義を分析するに当たってもレーニンの『帝国主義論』に「依拠」しなければならないのは当然であるが、問題はその「依拠」の仕方にある。第一次世界大戦の結果、金融資本の世界的な戦略配置は、レーニンが『帝国主義論』を執筆した時点のそれとは大きく変化した。このことは、はねかえって、それぞれの国の内部の金融資本の蓄積機構、支配機構を変貌せしめ、第一次世界大戦以前にはみられなかった諸現象を生起せしめたのである。したがって、レーニンに「依拠」するといっても、それは、それらの諸現象をすべて『帝国主義論』の直接の延長線上に位置づけるということではありえない。ところがゴスヴァイラーにあっては、五の「帝国主義で大銀行が果す役割」にもみられるように、「依拠」するといっても、それは、大戦後の新たな諸現象を『帝国主義論』における諸規定のどれかと結びつけて解釈するだけなのである。そのため、せっかく両大戦間および第二次世界大戦後のドイツ産業における自己金融の顕著化という

現象を取り上げながら、それを、「産業資本と銀行資本の関係の形態だけが変化したのであって、その本質が変化したのではなかったということが明らかになる。すでにレーニンによって確認された帝国主義で銀行が果す新しい役割は、急速に大きくなった」(124ページ)というファインガルの見解に賛意を表することによって、レーニンの「帝国主義分析」の枠の中に遮二無二押し込んでしまうのである。

しかし、このような「依拠」の仕方では、結局、すべては『帝国主義論』の中に規定されており、新しい現象というのは、それが「もっとも反動的な」、「ことのほか尖鋭化した」、「最も極端な」形であらわれたものにすぎないことになる。繰返すまでもなく、これでは何も規定したことにならない。しかしこれはゴスヴァイラーのみに特有の「依拠」の仕方ではない。第一次世界大戦後に新たに生起した諸現象を、『帝国主義論』で与えられた規定で、遮二無二割切ろうとする論者が例外なく踏み込む陥穽である。これこそ正に、レーニンの「帝国主義分析」の「もっとも」悪しき利用の仕方ではなかろうか。